

受 験 番 号	志 望 学 科 ・ コ ー ス
	学 科
	コ ー ス

[物理-1]

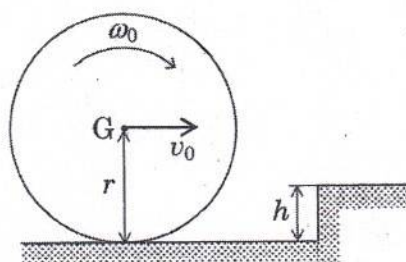
問題 1

下図に示すように、半径 r 、質量 M の球が、水平面上を滑らずに重心の速さ v_0 （一定）で進み、高さ h ($h \leq r$)の段差に垂直に衝突する。球が段差を乗り越える間は、球は段差のふちに常に接触しており、球はその接触点 P で滑らないと仮定する。球の重心 G および点 P を通る紙面に垂直な軸を、それぞれ G 軸、 P 軸として以下の間に答えよ。重力加速度の大きさは g とする。

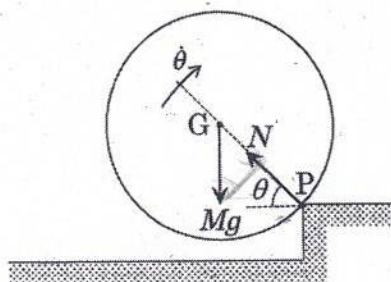
- (1) 球の G 軸まわりの慣性モーメント I_G 、球が点 P に接触している時の P 軸まわりの慣性モーメント I_P を求めよ。
- (2) 衝突前の G 軸まわりの球の角速度を ω_0 、衝突直後の P 軸まわりの球の角速度を ω とし、衝突直前と直後の球の角運動量の関係を I_G と I_P を用いて表せ。
- (3) 衝突後は力学的エネルギーが保存されることを用いて、球が段差を越えるための ω の条件を示せ。
- (4) 球が段差を越えるための v_0 の条件を r, h, g を用いて表せ。

次に、球が段差に衝突してから段差を越えるまでの間で、時刻 t における線分 PG と水平線とのなす角を θ （時計回りを正）とし、球が段差のふちから離れない条件を考える。

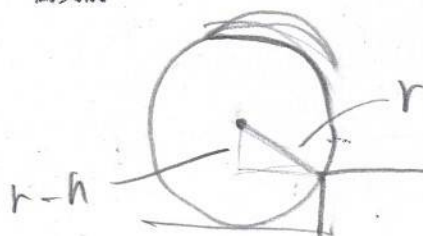
- (5) 球が点 P と接触している間、球が段差のふちから受ける抗力 N を θ ($= d\theta/dt$)を用いて表せ。
- (6) 衝突直後の P 軸まわりの球の角速度 ω を用いて、 N の最小値を表せ。
- (7) 球が段差を越える時にふちから離れないための v_0 の条件を r, h, g を用いて示せ。



衝突前



衝突後



$$\begin{aligned} \omega &= \frac{Mv_0(r-h) + \frac{2}{5}Mr^2 \cdot \frac{v_0}{r}}{\frac{7}{5}Mr^2} \\ &= \frac{5Mv_0r - 5Mv_0h + 2Mv_0r}{7Mr^2} \\ &= \frac{(7r - 5h)v_0}{7r^2} \end{aligned}$$

1.

(1) $I_G = \int_V \frac{M}{4\pi r^3} \cdot x'^2 dV$

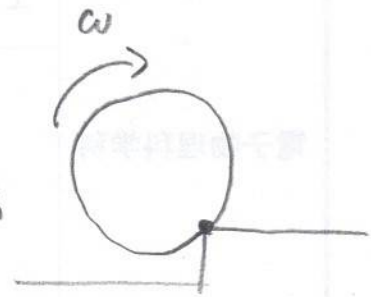
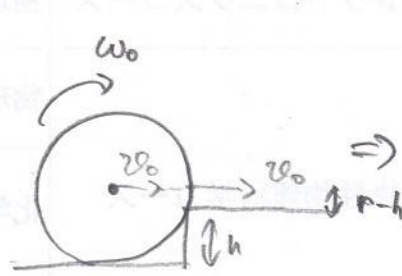
$= \frac{3M}{4\pi r^3} \int_0^\pi \int_0^{2\pi} \int_0^r (x \sin \varphi)^2 \cdot x^2 \sin \varphi \, dx d\theta d\varphi$

$= \frac{3M}{4\pi r^3} \cdot 2\pi \cdot \int_0^\pi \sin^3 \varphi \cdot \int_0^r x^4 dx$

$= \frac{3M}{4\pi r^3} \cdot 4 \cdot \frac{2}{3} \cdot \frac{1}{5} r^5$

$= \frac{2}{5} Mr^2$

$I_P = I_G + Mr^2 = \frac{7}{5} Mr^2$



(2) $Mv_0(r-h) + I_G \omega_0 = I_P \omega$

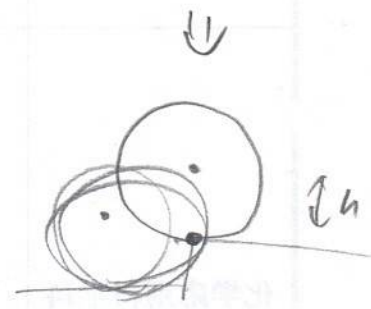
(3) 位置エネルギーと運動エネルギー、より高くなるので、転がる
登ったとき角速度を omega に変換する

$0 + 0 + \frac{1}{2} I_P \omega^2 = Mgh$

$\omega^2 = \frac{2Mgh}{I_P} = 2Mgh \cdot \frac{5}{7Mr^2} = \frac{10gh}{7r^2}$

$\therefore \omega \geq \frac{1}{r} \sqrt{\frac{10gh}{7}}$

$v = r\omega$



(4) $\omega = \frac{1}{r} \sqrt{\frac{10gh}{7}}$ 以上、(2)より入った、滑り出す瞬間は $\omega_0 = \frac{v_0}{r}$ 以上、

$Mv_0(r-h) + \frac{2}{5} Mr^2 \cdot \frac{v_0}{r} = \frac{7}{5} Mr^2 \cdot \frac{1}{r} \sqrt{\frac{10gh}{7}}$

$v_0 (r-h + \frac{2}{5} r) = \frac{7}{5} r \sqrt{\frac{10gh}{7}}$

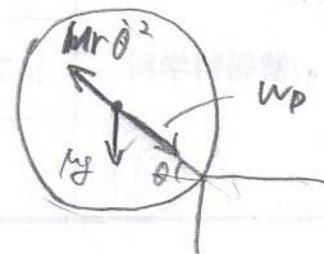
$\therefore v_0 = \frac{\frac{7}{5} r \sqrt{\frac{10gh}{7}}}{\frac{7}{5} r - h} = \frac{7r \sqrt{\frac{10gh}{7}}}{7r - 5h} = \frac{r \sqrt{70gh}}{7r - 5h}$

$W_P \sin \theta = Mg$
 $\therefore W_P = \frac{Mg}{\sin \theta}$

(5) ~~$N + Mr\dot{\theta}^2 = \frac{Mg}{\sin \theta} \therefore N = \frac{Mg}{\sin \theta} - Mr\dot{\theta}^2$~~

(6) ~~N 最小のときは $\theta = 0$ である。 $\therefore \sin \theta = \frac{r-h}{r}$~~

~~$N = \frac{Mgh}{r-h} - Mr\omega^2$~~



(7) ~~$N = \frac{Mgh}{r-h} - Mr \cdot \frac{(7r-5h)v_0^2}{49r^2} \geq 0$~~

~~$\therefore Mr \frac{(7r-5h)v_0^2}{49r^2} \geq$~~

$$(5) N + Mr\dot{\theta}^2 = Mg \sin \theta$$

$$\therefore N = Mg \sin \theta - Mr\dot{\theta}^2$$

(6)

N の最小値のとき衝突直後、 $\propto \varepsilon$ 時、

$$\sin \theta = \frac{r-h}{r}$$

$$\therefore N = \frac{Mg(r-h)}{r} - Mr\omega^2$$

(7)

(2) 4

$$\omega = \frac{Mv_0(r-h) + I\dot{\omega}}{I_p}$$

$$= \frac{Mv_0(r-h) + \frac{2}{5}Mr^2 \cdot \frac{v_0}{r}}{\frac{7}{5}Mr^2} = \frac{v_0(r-h + \frac{2}{5}r)}{\frac{7}{5}r^2} = \frac{v_0(5r-7h)}{7r^2}$$

衝突直後 $N=0$ のとき

$$Mr\omega^2 = \frac{Mg(r-h)}{r}$$

$$\therefore r^2\omega^2 = Mg(r-h)$$

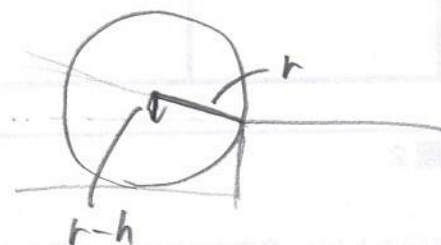
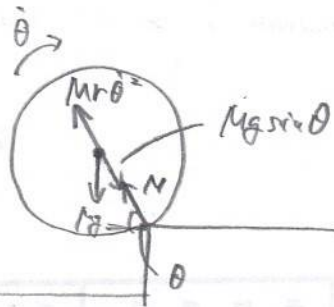
$$\frac{v_0^2(5r-7h)^2}{49r^2} = Mg(r-h)$$

$$v_0(5r-7h) = 7r\sqrt{g(r-h)}$$

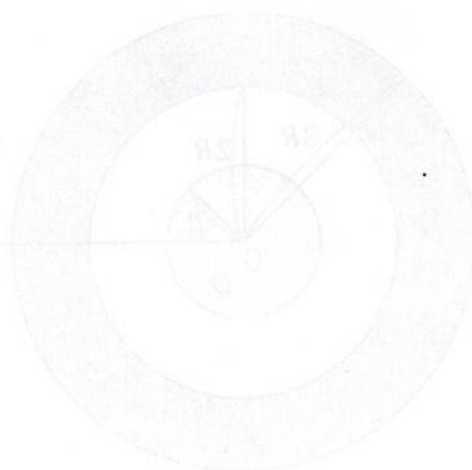
$$v_0 = \frac{7r\sqrt{g(r-h)}}{5r-7h}$$

また、小玉が離れる条件は

$$v_0 \leq \frac{7r\sqrt{g(r-h)}}{5r-7h}$$



$$Mr\omega^2 \leq \frac{Mg(r-h)}{r}$$



令和3年度 大阪大学基礎工学部編入学試験

[物 理] 試 験 問 題

受 験 番 号	志 望 学 科 ・ コ ー ス
	学 科
	コ ー ス

[物理－3]

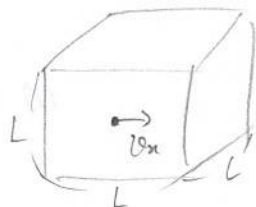
問題3

私たちの周囲にある空気を構成する分子はどれくらいの速さで運動しているのだろうか。以下の問に答えて求めよ。なお、各分子は様々な速度で運動していると考えられるので、各分子の速度の大きさの2乗を平均したものを $\overline{v^2}$ と表し、この平方根 $\sqrt{\overline{v^2}}$ を速さとする。

- (1) 1辺の長さ L の立方体の箱に質量 m の気体分子が N 個入って平衡状態になっているとする。分子の並進運動エネルギーの総和 E を求めよ。
- (2) 問 (1) の気体の圧力を求めよ。なお、 N は十分大きく、分子間の相互作用は無視できるとする。
- (3) この気体が理想気体とみなせるとき、絶対温度 T が問 (1) の E と比例関係にあることを示せ。なお、気体定数を R 、アボガドロ定数を N_A とする。
- (4) 空気を窒素分子のみで構成される理想気体とみなして、窒素分子の速さを求めよ。なお、温度は 280 K 、窒素の分子量は 28 、 R 、 N_A はそれぞれ次の値を使ってよいとする。 $R=8.3\text{ J K}^{-1}\text{ mol}^{-1}$ 、 $N_A=6.0\times 10^{23}\text{ mol}^{-1}$ 。

1molあたり
28

3.



$$3\overline{v_x^2} = \overline{v^2}$$

$$\frac{F}{L^2} \cdot L^3 =$$

$$(1) F = \frac{1}{2} m \overline{v^2} \cdot N$$

$$\frac{v_x \cdot 1}{2L}$$

(2)

1つの分子が速度 v_x の壁に衝突したとき、1回あたりに壁に与える力は、

$$m v_x - (-m v_x) = 2 m v_x$$

1秒間に N 個の分子が壁に与える力の総和は $\sqrt{}$ 力 F に等しく、

$$F = 2 m \overline{v_x} \cdot N \cdot \frac{\overline{v_x} \cdot 1}{2L} = \frac{m N \overline{v_x^2}}{L}$$

$$\overline{v_x^2} + \overline{v_y^2} + \overline{v_z^2} = \overline{v^2}, \overline{v_x^2} = \overline{v_y^2} = \overline{v_z^2} \text{ であるから、}$$

$$\overline{v_x^2} = \frac{1}{3} \overline{v^2}$$

$$\therefore F = \frac{m N}{L} \cdot \frac{1}{3} \overline{v^2} = \frac{1}{3} \frac{m N \overline{v^2}}{L}$$

よって、この気体の圧力 P は

$$P = \frac{F}{L^2} = \frac{1}{3} \frac{m N \overline{v^2}}{L^3} = \frac{1}{3} \cdot 2 \cdot \frac{1}{2} m \overline{v^2} \cdot N$$

(3)

理想気体の状態方程式は $PV = nRT$. $\therefore P$ は (1) の式に代入し、 $V = L^3$ より

$$\frac{1}{3} \cdot 2 \cdot \frac{1}{2} m \overline{v^2} \cdot N \cdot L^3 = n R T$$

$$(1) \text{ の結果と } n = \frac{N}{N_A} \text{ より}$$

$$\frac{2}{3} E = \frac{N}{N_A} R T$$

$$\begin{array}{r} 8.3 \\ \times 3 \\ \hline 24.9 \end{array}$$

$$\therefore T = \frac{2}{3} \cdot \frac{1}{N} \cdot \frac{N_A}{R} \cdot E$$

よって、 $T \propto E$.

$$(4) T = \frac{2}{3} \cdot \frac{1}{N} \cdot \frac{N_A}{R} \cdot E = \frac{2}{3} \cdot \frac{1}{N} \cdot \frac{N_A}{R} \cdot \frac{1}{2} m \overline{v^2} \cdot N$$

$$= \frac{1}{3} \frac{N_A}{R} m \overline{v^2}$$

$$(\text{分子量}) \times 10^{-3} = N_A m \text{ であるから、}$$

$$\overline{v^2} = \frac{3R}{(\text{分子量}) \times 10^{-3}} \cdot T$$

$$= \frac{3 \times 8.3}{28 \times 10^{-3}} \cdot 240$$

$$= 24.9 \times 10^4$$

$$\therefore \overline{v} = \sqrt{24.9 \times 10^4} \approx 500 \text{ m/s}$$